
妖幻抄 2 章

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖幻抄 2章

【Nコード】

N0839A

【作者名】

維月十夜

【あらすじ】

一人だけ、生き残った人間の少女・明と、あかるそれを拾った人狼の少年・氷雨ひめなかなか、気を許そうとしない明に彼は！？

2章：事件発生！

「明、こっちこいつ、降りてこいって！」

「うるさいっ！お前、あたしに何しようとしたっ」

明は、屋根に登って、氷雨を威嚇していた。

「なにつて…ただ、撫でようとしたただだよ…と、とにかく危険だ！」

「来るなっ、来てみるよっ、舌噛みきってやる！死ぬぞっ」

明は、氷雨に向けて怒鳴る。

「悪かった、謝る…だから、な？いい子だ、降りてこい」

氷雨は、いつの間にか、懇願している自分に気づく。

周りには、近所の、野次馬が集まってきていた。

「いやだっ！」

（あゝ…下心、出したのがマズかったのか？思いつきり、警戒されてるし）

「しょーがねえ、そこ動くなよ？」

氷雨は、身軽に、屋根に跳び上がった。

「やだ！くるなよっ！？」

後ずさる明。

「悪かったよ、ごめんな、明…明？」

肩を抱き寄せてやるが、明は、俯いたまま震えていた。

「ほら、震えてンじゃねえか、帰るぞ？」

顔を、覗き込んだ氷雨は、ぎくりとなった。

明が、泣いている。

彼女は、氷雨を睨みつけると、屋根から飛び降りた。

「お、おいつ！」

明は、俊敏に人混みを駆け抜けけると、小屋の中へ、逃げこんでしまった。

「おいつ、明っ！？」

2章：明と氷雨（前書き）

仲がいいのか、悪いのかよく分からない二人。
氷雨は、明に興味をもち始めて！？

2章：明と氷雨

氷雨は、少し距離を置いて座っている明を、横目で見てから、溜め息をついた。

「俺、出かけるけど…ついてくるか？」

「行かない」

即答である。

少し間をおいて、氷雨は、根気よく話しかけた。

「腹、へらないのか？喰いたい物、あるか？」

「いらない、出かけるなら…出かけてくればいいだろう」

「はあ…今朝は、悪かったって言ってるだろ？頼むから、機嫌なおしてくれよ」

「べ、別につ、怒ってなんかないぞ…ただ、分かんない、ただだ」

「分かんないって、何がだよ、ん？」

氷雨は、距離を詰めて、明の顔を覗き込んだ。

少し前までは、会話はおろか、近づくだけでも、逃げていた明だった。

しかし彼女は、真っ直ぐに、氷雨を見るようになった。

「不安じゃないんだ、前みたいに。人間に、似ているからか？でも、あたしたちと、お前は違うのに」

氷雨は、息をのんだ。

明の瞳だ、彼女の瞳は、深い、青色だったのだ。

（青い…キレイ、だ）

「どうしたんだ？氷雨」

固まっていた氷雨に、明は、怪訝そうに眉をひそめた。

「いや…なんでも、ねえ。それより、名前…やっと覚えたな」

少し、近づいたと思った氷雨。だが次に、彼女が言った言葉は、彼を、かなりへこませた。

「覚えたわけじゃない、ただ、言わなかったただけだ…気が変わった、外に行くんだろう？早く行こう」

「あ　こりゃ、散歩の前に、^{しっけ} 躰だな」

「躰？」

「お前は、俺のペット。お前の主人は誰だ？」

「あたしは誰にも媚びない」

「媚びなかったら、外には出さないぜ？」

「ふんっ、媚びるもんかつ、なら勝手に出てく」

出て行こうとした明を、氷雨は、腕を掴んで引き留めた。

「いいのかあ？そんなこと言って…お前一人でいたら、あつという間に喰われちまうぜ？」

「そう簡単に、死んで溜まるもんかつ、放せ！」

「行くぞ、絶対に、俺から離れるな」

氷雨は、掴んでいた彼女の手を、そつと放した。

「え、いいのか？外に出ても」

「いいから言っただ、勝手に、いなくなるなよ？」

「分かった！」

いきなりの笑顔に、氷雨は面食らう。

（かつ、かわいい…）

「明　　！勝手に先行くなつてンだろつ、聞いてンのか！」

（さすが、野生の人間。水を得た魚みてえに、生き活きしてやがるつ）

明は、氷雨よりも離れた場所で、彼に向かって、舌を出していた。

「からかってンな、あいつ…こら明っ、戻ってこい！」

明は、しばらく逡巡するようにしてから、氷雨の側に、走ってきた。

「よ　し、よし、いい子だな…そろそろ戻んっ」

氷雨は、そこから先の言葉を、喉に詰まらせた。

明は、氷雨の唇を一舐めすると、悪戯っぽく笑いながら、森の中に、走っていつてしまった。

「あつ、あ、いつつ！ただじゃおかねえっ！？」
氷雨は、気配を消して、明のあとを追った。

「ふんっ、オトコなんてちよろいちよろい」

立ち止まって、川の水を飲み、顔を洗う明。

氷雨は、溜め息をつきながら、それをみていた。

木の枝に足をかけて、宙づりになっている。

（なあにやってんだか、完っ壁に俺のこと忘れてやがるっ）

口元を拭くと、歩き出す明、藪に頭をつっこんで、何かを捜しているようだ。

（なにしてんだ？あいつ…あ、なんか捕まえた）

片手で、手近な葉を千切ると、その葉の中に、もう片手の中身を包んだ。

葉くずを払うと、大きく伸びをし、草地に転がる。

（暢気なモンだなあ、おい…今襲われたら、ひとたまりもねえぞ。ま、殺させねえけど）

「見ーつけたぞ明！もう逃がさねえっ」

背後に着地した彼を、明は飛びのいて除けた。

目くらましをして、走り出す。

「おっと、人間ごときが敵うかよ！逃がすかつ！」

軽々と走る明。

しかし、石に足を捉われて、何度も転び、傷だらけだ。

（血の足跡、ん…動きが止まったか、今だ！）

「捕まえたっ！」

「きゃああっ！」

二人は、もつれ合いながら、傾斜を転がる。そしてそのまま、池に落ちた。

「ぷはっ！なにするんだ、氷雨！」

「しかえしだ、さっきの…」

しれっ、と言つてのける氷雨。

「怒つたのか？」

「げんぜん、むしろ、嬉しかったぜえ」

「悪趣味だっ」ぷいつ、とそっぽを向く明。

「ん？」

「あたしも、お前もひどい格好だ」

「明、足…ケガしたのか？血の匂いがする」

「ああ…さっき走つたときに、石で切つたんだ。ほつておけば治る」

「見せる…」

氷雨は、明を抱き上げた。

「やめろっ、いつ、いらないつて、言つてるだろ、氷雨」

違和感を感じて、明は身じろいだ。

「かすり傷だ、深くなくて…よかったな」

「そうだな、氷雨、もう放してもいいぞ」

「ダメだ、このまま連れてく。傷、痛むだろ？」

「いらないつて！」

「いいから、黙つてろ。お転婆め」

「なにいつ！」あまりの恥ずかしさに、血が上つた明は、氷雨の首筋に噛みついた。

「いでで、噛むなつて…いでっ！」

「さつさと戻るぞ、まだ全部、お前に、気を許した訳じゃないんだからな」

「なら全部、許させるまでだ」

「強引だな…」

「なんとでも」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0839a/>

妖幻抄 2章

2010年11月12日04時31分発行